

内モンゴル東部地区におけるラマ教の影響と改革

劉景嵐

本論で述べる内モンゴル東部地区とは、現在の内モンゴル東部の四盟市すなわち通遼市、赤峰市、興安盟、ホロンボイル盟と、東三省すなわち吉林省・遼寧省・黒竜江省の西部地区を含み、元代から途絶えることなくモンゴル族が集団で暮らしていた地域である。この地域へのラマ教（チベット・モンゴル仏教）の伝来は元代に始まり、清代に最盛期を迎え、民国年間に衰えを見せ始める。やがて中華人民共和国成立後は、政府が宗教の自由を政策とし、あわせてラマ教に對して民主的な改革を行い、現在ではわずかに一部のモンゴル人がラマ教を信仰しているに過ぎない。ラマ教が内モンゴルの東部地区に伝播し流行した元代から民国までは、七〇〇年近くの長きに及ぶ。そしてこの七〇〇年間、ラマ教はモンゴルの社会、政治、経済、思想、文化の各領域において、等しく深い影響を及ぼしたのである。

一 内モンゴルの東部地区に対するラマ教の政治的影響

モンゴルの封建領主がラマ教を統治の道具とし、思想的な武器にしたことで、彼らがラマ寺廟の地位を強固にすることに努め、高級ラマ僧の権威を高め、各種の特権をラマ僧に付与したことは当然の結果であった。一五七八年（万曆六年）の仰華寺の法会は、各級の僧徒の政治的地位を規定したが、これはモンゴルの封建政治制度の転換点であり、モンゴルの僧俗の封建領主が共同して統治を行う制度が確立され、モンゴルの僧俗の封建領主が連合したことを示している。『モ

ンゴル・オイラト法典』と『ハルハ法典』は、各級のラマ僧における種々の政治的特権を詳細に規定した。これによって寺院とラマ僧は、社会において強大な政治勢力となり、しだいに政治に関与することになる。

清朝は中原を平定した後、モンゴル族が最大の脅威であるとはっきりと認識したため、モンゴル族に対しては極力懐柔政策を取った。例えば、一方では「北不断親」の政策、すなわち清朝の公主をモンゴルの王公に降嫁させ、或いはモンゴルの王公の娘を娶って清の皇室に入れるなどし、懐柔しながら監視を行った。また一方では、民族の軟化政策を実行し、極力ラマ教の普及に努めた。北京の雍和宮の昭泰門内には二つの八角亭碑があるが、この碑文は上述の政策を最もよく伝えていると言えよう。碑の両面には、漢、滿洲、モンゴル、チベットの四種の文字で次のような碑文が刻まれている。「蓋し、蒙古は仏を奉じ、最も喇嘛教を信ずるに因り、これを保護せざるべからず。以て懐柔の道と為さんと。清朝の統治者は、ラマ教の保護を国策と定め、「廟一座を修めるは、十万の兵を用いるに勝る」とし、ラマ僧を厚遇したばかりか、国庫の中から寺廟の建築費までも支出したのであった。また清朝では、「ラマの衆を轄するは、その治事を札薩克の如くせしむ」と規定されており、権力のあつたラマ僧には旗長と同等の権利と待遇が与えられ、清朝政府の有能な助手となつたのである。

清末政府、そして民国時期の北京政府と国民政府も、ラマ教の上層僧侶に対してはやはり特殊な政策をとつた。清末政府はモンゴルに対する政策を変えたにもかかわらず、ラマ教の上層僧侶に対しては、依然として籠絡と利用といった元来の政策を基本的に維持したのである。中華民国が成立した当初は、迅速にモンゴル地区の政局を安定させるため、モンゴルのラマ教の上層僧侶を積極的に籠絡する政策がとられ、民国政府が一九一二年八月に公布した『蒙古待遇条例』の中で「モンゴル各地の呼図克図、ラマ等の原有の封号は、概ね全て元のままとする」と規定された。その後また一連の優待条例が發布され、とくに最初に帰順したラマ僧には更なる優遇が加えられた。

歴代の政府がラマ教を奨励し尊崇したため、ラマ教はモンゴル人が信仰する宗教として王公貴族から一般民衆に到る

まで、生活の中の禍福、得失、疾病、婚姻、葬祭などは、全てラマ僧の考えに依拠した。とくに活仏は精神的に王公の思想を支配し、政治を支配していった。活仏以下の大ラマ僧の言葉は、「片言でさえ、王公と言えども敢えて逆らうことなし」であった。² そのためラマ教の上層僧侶は、モンゴル人の信仰を支配しただけでなく、モンゴル地区の政治に干渉関与し、さらには支配することさえ可能であった。近代以来、モンゴル地区で発生した一連の重大な歴史的事件では、往々にしてラマ教の上層僧侶が関与し、重要な役割を演じており、さらには上層僧侶が直接モンゴル地区の行政権を掌握することさえあった。こうした事実、まさにラマ教がモンゴル地区の政治や生活の中で非常に重要な地位を占めていたことを説明するに充分であらう。³

二 内モンゴルの東部地区に対するラマ教の経済的影響

この地区の経済に対するラマ教の影響は、二つの側面がある。一つは、ラマ教が殺生の禁止を戒律とし、元来シャマ教が行っていた家畜を殺す祭祀や家畜の殉葬といった遅れた習俗を改めたことで、牧業経済の発展にとって有益であった。この点に関しては評価すべきであらう。ラマ教がモンゴルに伝播する以前は、モンゴル人はシャマ教を信仰しており、常に家畜を殺して祭祀に用いていた。しかしラマ教は、封建主たちに「生き物を愛し、殺生を戒める」ことを説き、家畜の殉葬や多殺を禁止することによって、下層の民衆の好感を得た。それに加えてラマの伝教者は比較的温厚であり、単に僧侶であるだけでなく、医師、天文家、占い師を兼ねていたため、人々は一層容易にラマ教の柔和な教義を受け入れ、それによってシャマ教に取って代わることとなったのであった。このように、多くのモンゴルの民衆がラマ教を信奉し、殺生禁止の戒律を実行したことは、モンゴル地区の牧業経済の発展に貢献したと言えよう。

しかし一方では、ラマ教の寺院がますます経済の発展を阻害していった。これは、一つにはモンゴルの封建領主たちがラマ教への敬虔さを示すために、互いに競って自己の土地、牲畜、金銀財宝、アルバトゥ（属民）を寺院に施したた

め、ラマ教寺院はますます多く土地、家畜、属民を占有するようになり、しだいに一種の新しい封建領地が出来上がり、モンゴル経済の中で大きな実力を保持するようになっていったことによる。例えば、遼西ハラチン左旗地区では、清代のラマ教の最盛期、モンゴル族の集落には二〇世帯から一〇〇世帯が暮らしていたが、そこに大きな寺院が一つあり、それが東北地区の各地にあまねく及んでいた。また、わずか南公營子の王府の所在地だけでも、普佑寺、仁隆寺（汪子廟）、普雲寺（奶奶廟）、元隆寺（金頂廟）、金安寺（仏堂廟）など五つ以上の寺院があった。その中の普佑寺には、一八棟もの堂宇楼閣、二〇〇余の住居があり、三〇畝近くの土地を占有しており、最盛期には八〇〇畝以上の土地を所有していた。また普雲寺には一一〇余の堂宇楼閣があり、九〇〇余畝の土地を占有していた。清朝末期までに、ハラチン左旗地区のラマ寺院は九〇以上にまで達しており、乾隆、嘉慶の二朝の最盛期には、ハラチン左旗には四、〇〇〇人以上のラマ僧がいた。さらにラマ教を優遇するため、寺院やラマ僧は賦役、徭役、兵役の免除が規定されていた。そして賞賜などの方法によって、人々がラマ教を信仰して僧侶になることを奨励したため、社会には生産に従事しないラマ僧階級が生まれ、しかもラマ教の隆盛に伴い、そうした生産に従事しない人口が益々多くなり、労働力が激減し、生産経済の発展が損なわれていった。全てのモンゴル族の人口中に占めるラマ僧の割合は非常に高く、わずかに東部内モンゴルを例としただけでも、二〇世紀の三〇〜四〇年代の調査統計によれば、満洲国に併合された内モンゴル東部のジリム盟、ジョーオダ盟、ジョストウ盟とホロンボイル、西プトウハ、及びイフミンガン旗のモンゴル族（ダグルル、エヴェンキ、オロチョン等の民族を含む）の人口は一、〇八一、六三四人で、その他にラマ僧が二七、八四八人、ラマ教寺院が九九四あった。⁴ また内モンゴル西部のシリソグド盟、ウラーンチャブ盟、イフジョー盟、ハルハ旗四牧群、トゥメド旗、アルシャー旗、エズネー旗のモンゴル族の人口は三〇六、六三七人で、その他にラマ僧が五三、六一五人、ラマ教寺院が六三六であった。これらのモンゴル族を合計すると、総人口は一、三八八、二七一人、ラマ僧が八一、四六三人、寺院が一、六三〇で、ラマ僧がモンゴル族の総人口の五・八七%を占め、モンゴル族の男性人口の約一一・七四%に達して

いる。この数字は、人口に占める僧侶の比率が非常に高かったことを明確に示していると言えよう。こうしたラマ僧の数の多さに加え、ラマ僧の戒律では結婚の禁止が規定されていたため、モンゴルの人口総数は年々減少していき、モンゴル経済の発展にとって極めてマイナスとなったのである。

三 内モンゴルの東部地区に対するラマ教の思想文化的影響

ラマ教は、支配階級に対して次のように説いた。全てのハーン、ジン、タイジ、及び裕福な高位高官の身分にある人々は、その現世の榮譽や地位はいずれも本人が前世にて行った「善果」である。彼らは古代インドにおける伝説の大皇帝と元の世祖フビライの生まれ変わりであり、生まれながらにして全モンゴルを統治する権利があるのだと。また下層の民衆に対しては、次のように説いた。彼らが権利や地位もなく苦難にあるのは、いずれも前世的「罪業」の結果であり、まさに自業自得である。一切を天に任せ、闘争を放棄し、封建領主に従順になることよってのみ、現世の苦難から逃れ、来世の幸福を得ることができるとののだと。このような教義は、モンゴルの封建領主が人民を統治する上で大変都合がよく、そのためラマ教はモンゴルの封建領主の強力な庇護を得ることとなった。こうしてラマ教は、モンゴルの封建領主の積極的な後押しによって、迅速にモンゴル地区に伝播し、統治者としての地位を確立したのである。

ラマ教が伝わると、まず貴族が次々と虚幻の世界に耽溺し、無為に日を過ごした。そして貴族の首唱のもとで、下層の民衆もまた次々と信仰するようになり、仏を崇め、僧を敬うことが社会生活での不可欠な要素となった。民衆は、次のように考えた。世界の一切が運命によって支配されており、統治者は前世に積んだ善行のお陰で、現世での幸福を得ている。自分の現在の苦しみは、すなわち前世に犯した罪の報いなのであり、全てが運命によって定められ、情理になっっているのだと。ラマ僧は人々に忍耐や従順を説き、人生はすなわち「苦しみ」であり、ただ成仏することよってのみ「輪廻」の苦しみから脱却でき、現実を捨てて、精神の解脱を追求するよう教えた。そのため信徒は、しだいに幸

福な生活への希望を来世に託すようになり、不満や反抗意識がなくなっていく。それゆえ統治者や不合理な制度に対しても、自然と甘んじて受け入れていったのである。

ラマ教はモンゴル地区に伝播し、拡大していき、そして最後にはモンゴル民族の主要な宗教にまで発展した。ほぼ全ての民族に受け入れられたラマ教は、一時は「モンゴル民族の心の中の、消えることのない明灯」にまでなった。しかし、この「消えることのない明灯」は、世界の民族史上、屈強で勇猛と称えられたモンゴル民族を弱体化させ、勇猛な「馬上の民族」をほとんど「天国の奴隸」にしてしまったのである。モンゴル族の史学家であるポインフリー氏は、ラマ教はモンゴル社会の腐食剤として封建領主を含む全てのモンゴル民族を腐食させたと指摘しているが、そうした腐食作用の際立った現象が全民族の軟化であったと言える。

文化の伝播に関して言えば、ラマ教はモンゴルの民衆中に漢文化が伝播することに反対した。ラマ僧は主にチベット文の仏典を学び、合わせてモンゴル文と満洲文も学んだが、漢文については、ごく少数のラマ僧のみが翻訳の必要から学ぶことができただけである。ラマ僧は自ら漢文を学ばないだけでなく、民衆が学ぶことにも反対した。教育は寺院での宗教教育がほとんどであり、寺院以外の世俗の学校はごく少数で、学堂もなかった。そのためモンゴルの民衆が漢文化に接することはほとんどなく、異なった思想は抑圧されていた。やがて二〇世紀初めになると、幾人かの進歩的なモンゴルの王公によって新式の学校の設立が始まり、例えばクンサンノルブ王のハラチン旗での貢献などが挙げられよう。このように、漢民族の先進的な科学文化がモンゴル地区に伝播するまでには、相当長い停滞期間があり、それを経てようやくモンゴル民族の中に伝わったのであり、そうした伝播の遅れが、モンゴル地区の文化がかつて衰退した重要な原因の一つともなったと言える。

ラマ教はモンゴル民族にマイナスの影響を及ぼしたが、一方ではモンゴル文化の発展を刺激する上で一定の効果があった。チベット文が広範囲に伝播した以外にも、モンゴル文もまた大きな発展を遂げ、幾人かのモンゴル族の知識人を

生み出した。その中の一部の者は漢文化を学び、さらには外国文化さえも学んで、近代的な知識を有した高級知識人に成長していった。ラマ教がモンゴル民族にもたらした最大の利点は、医学と薬学であろう。ラマ教の医学と薬学は、モンゴル民族の特徴と結合して絶え間なく発展し、モンゴルの医学と薬学になり、そしてモンゴル地区の人民の健康増進に大きな役割を果たしたのであった。

四 ラマ教に対する一九四九年以降の改革

ウラーンフーを中心とした共産党の人々は、全モンゴル民の宗教がもたらす数多くの社会問題について、モンゴル民族の歴史や特徴から出発した創造的な宗教改革を進めていった。宗教の自由政策を正確に徹底的に執行する上での問題に関して、ウラーンフーは多くの演説や報告の中で系統的に論述している。一九四六年七月、ウラーンフーは『モンゴル地区工作における幾つかの問題に関して』の演説の中で、次のように指摘している。「王公、ラマを打倒するのではなく、王公、ラマと団結して自治解放を推し進める」「連合統一戦線の問題について言えば、王公、ラマもみな含まれる。ラマ、王公等の階層もまた、政府の中に一定の地位を確保させるべきである。要するに我々は、自治政府を全民族の各階層が団結して一緒になった政府に作り上げるのだ。彼はまた、次のように指摘している。「今後、民族や宗教における上層人士とその他の方面との統一戦線の任務については、我々は必ず継続して徹底的に『包下来、包到底、安排使用、教育改造（取り込んで、一人残らず取り囲み、仕事を振り分け、改造教育を行う）』の方針を実行しなければならない。彼らの実情にに応じて適切な仕事をあてがわなければならない……それらの人士の中の、多くの人は民族や地方の歴史故事に詳しいので、彼らを組織して歴史資料の編纂に当たらせるべきである。ラマ教の哲学、医学に関しても、彼らを組織して整理に当たらせ、彼らの生活については必要な配慮を行い、彼らの学習を適切に組織し、彼らが思想上、政治上、絶え間なく進歩するよう手助けし、彼らを社会主義の労働者に改造させなければならない」。

一九五七年になると、ウラインフーは、ラマ教の改革についてかなり成熟した全体構想を作りあげていた。この時、国内と区内の情勢もまた、ラマ教の改革を進める上で必要な経済的基盤と政治的条件が整っていた。

内モンゴルの宗教改革は、主に三つの方面に重点がおかれた。

一、ラマ教寺院の財産と上層ラマ僧の生産手段について、社会主義改造が行われた。寺院の土地剝奪制度が廃止され、寺院の土地、家畜については買い取り方式によって、人民公社と公私合営牧場に納めさせた。寺院に支払う地租、鉅租を廃止し、寺院に働きかけ、余った資金を実業、或いは工業、農業、牧業の基本産業を興すために投資された。上層ラマ僧の生産手段については、彼らを説得して人民公社や公私合営牧場に加わらせた。一九五八年、内モンゴル地区の寺院の家畜は約六〇万頭であったが、全て合作社、人民公社、公私合営農牧場などに加わる方法によって改造が進められた。それと同時に、寺院もまた鉄工所、製紙工場、皮革工場、たばこ工場等、多くの小型企業、工業などを設立した。一九六一年の調査によれば、当時各種の労働に参加したラマ僧は一一、五九四人であり、農区、牧区の生産の発展にとって重要な役割を果たしたのであった。

二、ラマ僧に、広く労働の喜びを教える思想教育が行われた。そしてラマ僧の就職を奨励し、学問や知識を学ばせ、生産労働に参加させ、徐々に自活できる労働者へと変えていった。解放当時、内モンゴルのラマ僧は約六万余人で、モンゴル族の人口の約八％を占め、男性人口の約二〇～三〇％を占めていた。こうした状況は、モンゴル地区の経済や文化の発展にとって深刻な障害となっていた。そこで、大寺院にラマ文化学校の設立を働きかけ、少年、青壮年のラマ僧を集めて民族の言語や文字を学ばせ、学問や知識のレベルアップを行った。一九五一年から一九五八年にかけて、全区五〇〇以上の寺院中、一〇〇以上の寺院にラマ文化学校が設立され、ここで学んだラマ僧は一万人以上に達し、五〇歳以下のラマ僧中、約八〇％が文盲ではなくなり、その中の半数以上が中学校の学習レベルにまで達した。とくに何人かの少年ラマ僧は公立の学校に派遣されて学び、その中の数名は大学に進学し、海外に留学した者さえいる。そして大学

教授や著名な医師、科学技術の専門家となって、それぞれの職場で重要な役割を發揮したのである。宗教改革以前、ラマ僧は生産労働に加わることはなかった。一九四九年以降、民族の経済発展や人民の生活改善のため、政府の呼びかけのもとで各地のラマ僧がしだいに生産労働やその他の仕事に加わるようになっていった。とくに一九五八年の人民公社化以降、全区の七〇〜八〇%のラマ僧が生産労働に加わり、青壮年ラマ僧の九八%が農村、牧区人民公社、工場、鉱山企業、及びその他の生産労働に加わったのである。

三、ラマ寺院における不合理な制度についても、また改造が行われた。多くの寺院では民主管理が実施され、宗教活動の規模や浪費が年々減少していった。以前、大寺院では一年間の法要日数が二、三百日にも及び、一〇万円近くが浪費されていた。しかし社会主義の改造を経て、毎年の法要日数は二、三十日に減少し、経費も数百元に抑えられるようになった。上層ラマ僧が下層ラマ僧を殴ったり罵ったりすることや、還俗や結婚の制限も基本的になくなった。

還俗したラマ僧の社会化は、社会の生産力を改革し解放した。宗教改革の実施以降、青壮年ラマ僧はしだいに還俗して故郷に帰り、各種の生産活動に加わり、結婚して子供を作った。そのため、モンゴル族の人口が大幅に増加したと同時に、モンゴル族の女性の生産や生活の負担が軽減され、日増しに妥当な人口構成となっていった。宗教改革は多くのラマ僧を自活できる労働者にし、生産力を解放した。宗教改革は、モンゴル族の人民を宗教的思想の束縛から抜け出させ、新たな気持ちと活力によって社会の建設に加わらせたのである。宗教改革を通して、モンゴル民族が千百年来にわたって築き上げてきた游牧文明と仏教文化の精髓を選び取り、その糟粕を捨て去って、優秀な伝統文化を發揚させることができた。それはモンゴル族の伝統文化の伝承を推し進める上で、大いに役立ったのであった。

註

- 1 中国大事記〔N〕『東方雜誌』九卷四号、一九一二、二〇〇

- 2 黄奮生『蒙藏新誌(下)』[M](広州、中華書局、一九三八、七一八)
- 3 金海「近代喇嘛教与蒙古地区政治」[J](『中央民族大学学报』、二〇〇五、四、八三)
- 4 『満洲帝国協和会調査』[M](長春、満洲事情指南所刊印、一九四三、七九)
- 5 烏蘭夫革命史料編研室『烏蘭夫民族工作文選』(『内部資料』、一九九二)